



俳句雑誌[おき]

2月号

沖 発行所

# 工 学 部

能 村 研 三

## 古参同人のご逝去

昨年晩秋から新年にかけて相次いで古参同人のご逝去の報が入ってきている。

鳥居秀雄さんは、「沖」では決して古参と呼ばれるほど古くから在籍してはなかったが、私にとっては市川学園時代の先輩でクラブ活動こそ違ったが同じ部室でお世話になった人である。朝日新聞の投句をきっかけに「沖」に入会、多くの句会にも参加いただき、お正月には毎年各地方に伝わる縁起物の干支の人形をくださった。私とほぼ同齡であったので若くしての死は悔やまれてならない。

暮には大分の前支部長の瀬戸石葉さんが亡くなられた。瀬戸さんも「沖」では古く、初代支部長江洲雲庭さん時代から支部をお世話いただいていた。警察にお勤めであったので、実直そのものの方であった。私とは、一昨年の別府の九州大会でお会いし翌日の吟行会にもご参加され、お話したのが最後になってしまった。

年が明けてから京都の角田登美子さんが亡くなられた。角田さんからは昨年、俳句が出来ないので、「沖」を辞めたいとの申し出があったので

冬 木 道 果 て て 峙 つ 工 学 部

澆 刺 と 山 彦 も ど る 冬 至 か な

歳 晩 や 朱 を 極 め た る 火 伏 護 符

煤 逃 げ て 文 具 売 り 場 に 惚 け ゐ し

植木算鶴亀算に木の実落つ

太梁の凍てて緊るや葺二階

数へ日や各階止まりのエレベーター

二十日正月耳学問を殖やしけり

大橋俊彦句集『深呼吸』

あらたまの沖の沖見て深呼吸

岡崎伸句集『遠眼鏡』

初景色手筒絞りの遠眼鏡

十月の終わりに、角田さんと坂本俊子さんのお見舞いに京都のご自宅をお伺いした。ご不自由そうではあったもののお庭までお迎えに出られるほどで元氣な様子に安堵したばかりであった。角田さんは安居正浩さん、北村幸子さんと共にファミリーで「沖」にご参加いただいている方であった。

十二日には、愛知岡崎の初代支部長をお勤めいただいた柴田雪路さんが亡くなった。何かスケジュールを都合してお通夜には参列させていただいた。柴田さんは、現在の愛知支部の基礎をお作り下さった方で先師時代から東海各地で勉強会、研修会を開催し、平成四年には徳川家ゆかりの名刹の大樹寺に登四郎句碑を建立していただいた。

五月の五百号を前にして、先師の時代からお世話になった方々が次々に亡くなられるのは何とも寂しいことである。五百号の誌齢の厚みもまさに、ここで亡くなられた方々のお一人お一人のご努力の積み重ねであると思ひ、心より感謝申し上げますと共にご冥福をお祈り申しあげたい。

しかし、天国では先師、林翔師が迎えられて賑やかな句座が開かれているのかも知れない。

# 蒼茫集



野 獣

辻美奈子

短日のきちんと疲れぬる体  
冬うらら猫は欠伸のとき野獣  
鬼柚子の観音の手にあるごとく  
網膜に残るうすずみ冬の蝶  
極月の馬身にも似てオートバイ  
地の底に水の流るる聖夜かな

大 雪 上谷昌憲

冬虹や海へはみ出る高速路  
月蝕に鬼柚子の相極まれり  
街角の老舗の聖樹真つ赤つ赤  
震ると電車は地下へ身を捻り  
人間探党派に絡まるる年忘れ  
大雪や歯科医のぬるき漱水

綿泥棒

安居正浩

綿虫は綿泥棒の帰りかも  
月に影貼りつけて地球は冬  
暖房にむかしむかしで子は眠る  
歳の湯に四肢を伸ばして鳥になる  
小春日や老人ホーム見学会  
ゆるやかに記憶をめくる除夜の鐘

舞台裏 辻直美

銀座まで出て年寄りの年忘れ  
通らせてもらふ歳晩の舞台裏  
ねんねこや子育てのころ嫁の頃  
晩年や数へ日に似て過ぎゆくも  
遠の子も隣る子も来て年守る  
冬至凧地球いささか病む気配

逃げきつて

千田百里

十二月八日 蛾 @ 涙の片流れ  
冬日逃げきつて 会議の始まりぬ  
悴みて月蝕たのし土曜日  
月蝕の始終を抱き 枯木立  
山茶花の咲ひ過ぎたる日和かな  
山眠る地軸に沿うて傾ぎつつ

初雪

大畑善昭

少し息抜きせぬかと 烏瓜の照り  
大根を埋け 晴々と人に会ふ  
草に乗りはじめ 初雪らしくなる  
歯を三粒見せて 笑まふ 兎冬うらら  
日の当る方が 表面 裸木は  
どの木にも 朝日を配りけらつつき

アンテナの向き

北川英子

暁紅の湖霧に 翔つ 羽音かな  
水仙の節操かたき 青薔

義士の日のアンテナの向き 正しをり  
眠る 山 天 体 鏡 の 窓 開 く  
根負けし さう 自然薯 の この 粘 り  
冬薔薇 「始めに言葉あり」と 添へ

間合の笛

藤原照子

切株と分かつ 体温 冬うらら  
狼藉めく 落葉の上 に 朴 落 葉  
小間切れの 掃除も 齡石 露日和  
吾が 動くほかは 音なき 冬灯  
語り部の 間合の 笛や 山眠る  
山脈に かかり 全きし ぐれ 虹

勢ひ鎮め

久染康子

一級 河川 雪原を 貫けり  
夕映えに 浮く 裸木の 毛細管  
雪を 被て 名も 無き 山の 威風かな  
山眠る 黄色い ヤッケの 搜索隊  
天空に 仮名文字 広げ 白鳥来  
生木 焼べ 勢ひ 鎮める 浜焚火

雨意 荒井千佐代

産み了へし鶏がさざんくわ踏み歩く  
母の忌の潮鳴りせまる白障子  
煮凝やとんがつて来し波の音  
蓮根掘の一服ひたひの泥乾き  
沖よりの風に雨意あり兎罫  
蘂苞に日の香潮の香寒牡丹  
葱 甘し 細川洋子

謝つてしまへば葱の甘かりし  
書類おほかた短日のシユレッダー  
凧やとかく増幅する噂  
小春日の土偶の目蓋ぼつてりと  
しぐるるや人に左脳と右脳あり  
大川の手裏剣びかり十二月

祈り 湯橋喜美

液状化癒えず葉牡丹渦密に  
田仕舞の産湯のやうに鍬洗ふ  
戒壇の真闇に祈りをり真冬  
ふるさとに雪降りをらむ根深汁  
波止に伸ぶ冬至茜の波がしら  
木枯や山脈尽きてすぐに海

短日 森岡正作

強霜に最も富士の尖りけり  
忘れ物して短日を折り返す  
寒林を行く総身を研ぎ澄まし  
義士の日の通帳残額気になれり  
凧にもつとも聡きハープ橋  
フランスを遠し遠しと牡蠣啜る  
ゆつたり 田所節子

雪嶺に刃物返しの日ざしかな  
小春波ゆつたり海も呼吸して  
自然薯や折れ易き性吾も持ちて  
副作用も快癒への道冬木萌ゆ  
鬼の子のひとり遊びを風あやす  
日を巻き込み巻き込み波の澄みにけり

靴音美人 渡部節郎

熟柿透く光に甘さ重さかな  
木守柿おき火のごとく残りをり  
さざ波の小春語りや三番瀬  
冬枯の幹に根性みつけたり  
霜の夜の靴音美人と言ふべかり  
電線の結び目となり寒雀

昔ふくらむ

成宮紀代子

柚子の袋積みて巡回入浴車  
昔ふくらむふるさとの丸き餅  
天井をカルテの巡る室の花  
手渡しに蒲団干しみる消防署  
凍裂の木の下を行く鹿の群れ  
逝く年や青きシーツのままの屋根

絆

宮内とし子

小春日の童話の国に行かれしか  
毛糸玉家族の絆引きよせて  
寒林の中静電気あるやうな  
人間が丸くなつたと新走  
枯るもの枯れ残るもの異人墓地  
数へ日の蛇口の水の勢ひたつ

寒波来る

高橋あさの

松の瘤あらくれだちて寒波来る  
着ぶくれて自づと祈り多くなり  
遠富士のけふよく晴れて木守柚子

自家製の味噌もしのばせ歳暮くる  
夜番の柝むかし門限ありしかな  
暗きより声の先立つ除夜詣

山眠る

北村幸子

山眠る走り根絆深くして  
鴨の列カメラ目線に寄りてくる  
冬夕映余生のいろと思ひたし  
実千両楷書に生きてきし夫へ  
綿虫の消えゆく方へ独りの歩  
しぐるるや見舞の一語ぬくめをり

冬耕

鈴木良戈

冬耕の影絵めきつつはかどれり  
懸大根島の朝日の溢れけり  
鳩浮かぶ夕さざ波の小名木川  
枯尾花汽笛のほうと単線路  
空咳に目覚めし夜の重き闇  
鬼火立つ富士は裾より暮れにけり

# 潮鳴集



快諾 齊藤 實

買ふ人の又ふくよかなおかめ市  
月蝕に温もるごとく寒の月  
折鶴の四方を尖らす寒夜かな  
風呂吹に箸すつと入り快諾す  
新しき護符に力や冬構

糊の利くワイシャツ 井原 美鳥

蓮の実とぶ眠るかくごの二千年  
師の落葉かなカサと舞ひコソと鳴り  
笹鳴きや三つ折ればもとの径  
糊の利くワイシャツ義士の日でありぬ  
毛糸編むシヨパン・リストと編みすすみ

やんはり 甲州 千草

鶏頭にややこしき字の籠りゐる  
子音めく十一月の乾し茸  
泣きさうな雲も詰めたし落葉搔  
綿虫を払ひやんはり断はる手  
赤々と爪染め凧に出でぬ

劍 玉 林 昭 太郎

毛糸編いま米原を通過中  
絵葉書の空が真つ青神の留守  
上州の冷えもつつみて葱届く  
葱一把立て掛けてあり試着室  
劍玉のかちんかつんと雪を呼ぶ

# 沖作品



## 能村研三選

入り船の音や秋澄む盛漁期

千葉

座古 稔子

また停車釣瓶落しのローカル線

冬林檎ひとりといふは声立てず

重力の地球に在りて日向ぼこ

煙茸地の溜息を吐きにけり

福島

佐川三枝子

錆び初めし蔵王連山鳥渡る

身に入むや座敷わらしの消えし闇

原罪を背負ひて柿の枝に漬ゆ

来年のことには触れず秋耕す

さざ波の夕日に染まり鳩の笛

岩手

高橋 和枝

散紅葉懸樋の水に添うてくる

ひとはだの酒一合にうるめ焼く

窓越しの冬日は部屋を膨らます

高速道灯の帯となり暮早し

豊の秋目で追ふ嬰の知恵初め

市川市

荒井千瑳子

軒先の郁子売る谷戸の小商ひ

コラージュにひと刷け紅の冬めける

冬ぬくし眼にてもと言ふ犬とゐて

冬の灯をともし待つ人あるごとく

同郷と知れば友なり新酒酌む

東京

五十嵐章子

モビールやさかなふはりと秋の風

秋日濃し下りは早きベロタクシー

ウインカー灯る車列や小夜時雨

暮早し戦後の残るガード下

掘炬燵大概のことここで決め

千葉

浅野 吉弘

冬帽子脱がねばならぬ人に会ふ

自転車の尾を振る荷台泥大根

延々と流るる千曲川寒の月

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

来年のことには触れず秋耕す

佐川三枝子

裏作の畑に種を撒くことや、稲刈りを終えた田の土を起すことを秋耕という。春の「耕し」に比べて、気持ちはややゆったりとした気分になるはずなのだが、佐川さんのお住まいになる福島では今年はやや事情が異なる。原発事故の影響で放射線量の問題も暗く影を落とす。作物が出来る頃にはどうなっているのか先行きは全く不透明であるが、だからと言って何もしないわけにも行かず秋の耕しを行った。やるせない気持ちが伝わってくる。

窓越しの冬日は部屋を膨らます

高橋 和枝

たとえ木枯が木立を揺らしていても、窓からの日差しは何とも心地よく、なものにも替えがたい豊かな気持ちにさせてくれる。今年は電力不足で節電が言われているので、昼間は暖房も控え目に使っているが、窓越しの豊かで優しい恩恵は、暖房器具では味わえぬ自然の滋味が溢れている。暖かく部屋を膨らませてくれるようだ。

冬の灯をともし待つ人あるごとく

荒井千瑠子

独り暮しの寂しさが背景にある。待つ人があった時代には玄関の明かりをつけて帰宅を待った。しかし、今はその待つ人もいなくなってしまう。何のために明かりをつけるのと自問自答しながらも、待つ人のいた時代の温りが懐かしく思われた。

(以下略)

冬服の白洲次郎の伊達ごのみ

座古 稔子

白洲次郎は戦前・戦後の政治に深く関わり、若い時ケンブリッジ大学へ留学し、英国紳士の精神とマナーを身に付けたので、身だしなみや服装にことに気を配った人であった。たとえば、室内ではジャケットのフラップは中にいれるとか、建物の中に入るときの帽子やコートを脱ぐタイミングにも作法があったそうだ。昨今の国際交渉には、白洲次郎のような毅然とした態度を貫ける人が求められているのかも知れない。かつてGHQから「従順ならざる唯一の日本人」と言わしめた人でもある。一八〇センチを越す長身、際立った美貌の白洲次郎こそ伊達男と呼ぶに相応しい人であった。